

天 皇 杯 受 賞

廃校問題をきっかけに、全住民で取り組んだ漁村集落の挑戦

受賞者 伊座利の未来を考える推進協議会

とくしまけんかいふぐんみなみちよういざりちく
(徳島県海部郡美波町伊座利地区)

■ 地域の沿革と概要

美波町は、平成18年3月に海部郡の由岐町と日和佐町が合併して誕生した町であり、徳島県の南東部に位置する。総面積140.85km²、人口8,878人で、太平洋に面した漁業の盛んな町である。

海岸部は、海亀が産卵をする砂浜、離島、海食崖、多様な岩礁等、非常に変化に富んだ海岸線となっており、多くは「室戸阿南海岸国定公園」に指定され、その入江に集落が点在している。平野部は少なく、町の背後はすぐ山地となっている。

気候は、太平洋気候区域にあり、年間の降雨量は約3,000mmで日本の最多雨地域でもある。沿岸では平均気温が約16℃になり、真冬でも海水温が10℃以下に下がることはなく、冬でも暖かな気候で、海岸部や離島には亜熱帯植物が分布している。

産業は古くから漁業が中心であり、漁具・漁法が発達し、延縄や定置網、和船の建造等が工夫されてきた。特産品は、アワビ、サザエ、伊勢エビ等の魚介類で、その加工品であるかまぼこ等が有名である。



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

伊座利地区は、美波町の東端にあり、入り組んだ海岸線と三方を山に囲まれ、平坦地は少なく背後には山が迫り来る、町内で最も小さな集落である。

総世帯数51戸、うち漁家世帯が16戸（全て個別経営体）、また、漁協正組合員は27人、準組合員16人と地区住民の約半数が漁業に従事する集落である。最盛期には400人程いた人口が、平成7年には97人に激減するなど急速に過疎化が進んだが、集落が一丸となって漁村留学を通じた集落への転入者受入に

取り組み、18年現在、124人まで人口は増加している。

主産業は漁業で、夏場のアワビ、サザエ、秋の伊勢エビ、秋から春にかけてのタチウオ、ブリ、タイ、イサキ等多様な漁獲が行われている。地区の漁家等で組織する伊座利漁協では年間116tの水揚げがあり、アワビは美波町の中でも最高値で取引されている。

特に、全国的にも珍しい、宅急便による鮮魚の直販や、地域資源のアラメ（昆布の一種）を利用した「アラメ加工品」の製造販売、さらに、伝統漁法を活用した体験漁業の取組など、漁業から“海業”への新たな挑戦も生まれている。

第1表 地区の概要

事 項	内 容	
地区の規模	集落単位	
地区の性格	地縁的な集団	
漁 家 率		31.4%
	(内訳)	
	総世帯数	51
	漁 家 数	16
漁業世帯		
	(内訳)	
	個人経営体	16
	うち専業	9
	兼業(主)	3
	兼業(従)	4
主要漁獲物	あわび	35百万円
()内粗生産額	たちうお	3百万円
	あじ類	2百万円

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

伊座利地区のむらづくりは、平成4年、急激な過疎化・高齢化により児童生徒数が激減し、地区の「伊座利校（へき地2級の小・中併設校）」の廃校問題が勃発したことがスタートである。かつて陸の孤島と称された時代でも400人いた人口が、100人程度に減少し、新聞も採算が合わないと配達がストップする程であった。

地区では、「伊座利校」と地区住民が一体となって、運動会をはじめ様々な活動を長年行ってきた経緯があり、特色ある多種多様の教育活動を積み重ねてきていた。このため伊座利校は、地区の宝であり、また住民の心の灯火であり、さらに伊座利のシンボルとなっていた。つまり学校の廃校はまさしく集落存亡の危機でもあった。

こうした中、漁業不振にもめげず、海と共に強く生きぬいてきた住民たちは、「伊座利魂」は不滅なりの精神で、英知を結集し、自主的・創造的な「地域おこし」に立ち上がることになった。

当時住民の有志が、「学校の灯火を消してなるものか」と議論を重ねる日々が続いた。この活動は、すぐにすべての住民の心を一つにまとめ、住民の一致団結という大きな力になった。「魅力ある楽しい海の学校」をつくろうという思いが一つにまとまり、「おいでよ海の学校へ」という交流イベントを開催することになった。

これは、伊座利校への転校を呼びかけるため、県内外の子供達を対象に、定置網漁やクルージング等を楽しんでもらう一日漁村留学体験だが、単に子供の受け入れだけが目的でなく、最大のねらいはコミュニティのある地区としての活性化を図っていくことであった。開校までの約1年の準備期間には、地域住民の知恵が結集され、伊座利を思う心、未来への願いが込められた。こうして、

平成11年1月、ついに“第1回おいでよ海の学校へ”を開催した。

このすべて手づくりによる、小さな地域と小さな学校の総力を結集したイベントの成功が、住民一人一人に創意工夫を生み出し、モラル（士気）を高め、「やればできる!」ということを実感させるものとなった。日増しに伊座利は活力に満ちてきたと誰もが実感でき、この海の学校は、「美しい海、厚い人情、豊かな体験学習」が好評で回を重ねるごとに留学生も増えてきた。

(2) むらづくりの推進体制

「おいでよ海の学校へ」の開催は、地域住民に勇気と元気を与える一方で、大きな問題も提起することになった。

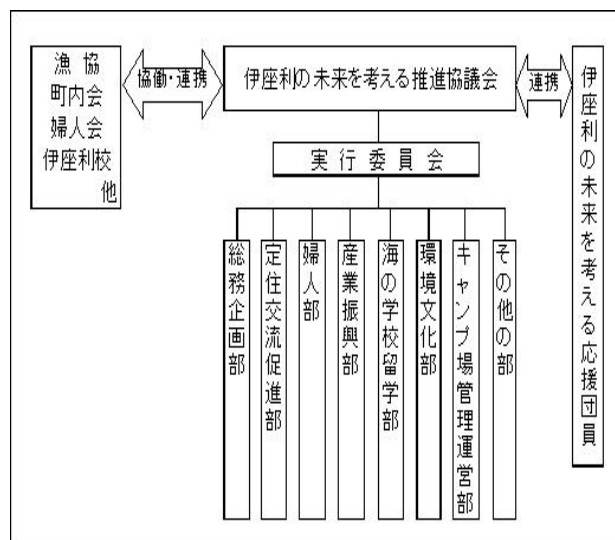
一つは、受け入れ施設がないこと。宿泊可能な受け入れ施設を緊急に整備することが必要となり、粘り強い折衝の末、「中山間地域活力あふれる田舎整備事業」を活用して、平成12年4月に、夢の交流施設「にぎわいの館」を、続いて12年11月には滞在施設「やすらぎの館」を整備した。

二つめの問題は、計画的、継続的に地域づくりを実施するための組織体制の整備であった。この組織づくりにおいて特に問題となったのが、町内会や婦人会、漁協、伊座利校等の地区にある組織との協働関係をどう調整するかということであった。このために各組織との話し合いを連日のように重ね、対策を検討してきた。最終的に、地区にあるすべての組織を融合する新たな組織として、平成12年4月に住民全員参加による、小さな漁村の夢多き組織「伊座利の未来を考える推進協議会」を設立した。

協議会は、子供からお年寄りまで地域住民の全員が加入し、11の部で構成する実行委員会が、町内会や婦人会、漁協、伊座利校等地域にあるすべての組織とも連携しながら運営にあたっている。

生産面の活動を主体的に担うのが、産業振興部と婦人部で、漁協と連携しながら、魚介類等地域産品のPR活動等を行っている。一方生活・環境改善面では、総務企画部や婦人部、定住交流促進部が中心となり、地域活性化に関わる活動全般の企画運営、都市を含む他地域との交流の推進や地域産品のレシピ開発等を積極的に実施している。海の学校留学部は、伊座利校と連携しながら、「おいでよ海の学校へ」の活動を通じた児童生徒の受け入れ窓口となるなど、地域住民が全員主役のむらづくり活動を展開している。

第2図 推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 住民が自ら動き出したむらづくり

地区のシンボルである「伊座利校」の廃校問題をきっかけに、「学校の灯火を消すな！」を合言葉に、地域住民が立ち上がった。住民の英知を結集し、自主的・創造的なむらづくり活動を開始した。

(2) 伊座利校への子供や保護者の転入を呼びかける交流

住民が議論を重ね、思いが一つになり、地域おこしの原点である「おいでよ海の学校へ」を、平成11年1月に開校した。以来、県内外の親子連れや住民の参加を得つつ毎年開校しており、今年で13回目を迎えた。

(3) 全員が主役のむらづくり

「伊座利の未来を考える推進協議会」は、地域住民全員が加入し、地域のあらゆる問題に取り組むために、町内のすべての組織と連携し、草の根的な活動を展開している。

(4) 親子一緒に受け入れる「漁村留学」

伊座利校に地区外の子供達を受け入れる漁村留学は、親子で転入することが原則になっている。「子供は親と一緒に暮らすのが一番」との思いからであり、転入してきた親子には、家族同様の思いで接している。

(5) 大きく広がる交流の輪

「交流」をキーワードに地区内外で開催した多彩な活動を通じて、全国各地から多くの人々が訪れ、住民との交流を深めている。また、関西・関東地域等に「伊座利応援団」を組織し、交流の輪を拡大させている。

2. 漁業生産面における特徴

(1) 漁業振興の取組

ア 旬の海の幸をあなたに直送

大敷網、小敷網の二つの定置網漁に入る様々な魚のほかに、夏の海士（あま）によるアワビ漁や、秋の伊勢エビ漁等、季節にあわせた豊かな漁が行われており、伊座利漁港に朝水揚げされた旬の魚を直送している。産地の顔が見えて、安心して新鮮、市価よりも安くて美味しいと好評を得ており、漁価の低迷が続く中で、漁業者の生産意欲を高めている。

イ 漁業体験、漁村体験

定置網漁や伊勢エビ漁、漁船クルージング、カヌー等のほか、新鮮な魚介類の料理体験等、季節ごとの漁業や漁村体験が行われている。体験参加者は、魚や特産品の購入、さらにリピーターにもつながっている。これら活動が漁業や漁村への理解を深め、漁村への定住促進や、漁業への新規就業のきっかけづくりにもなっている。



写真 1 定置網漁体験

ウ 漁業者の意識改革～アワビの出荷調整で有利販売～

夏のアワビ漁は、かつては一年間の生活費を生み出すほどであった。近年は、漁獲量の減少と価格の低迷が続き、そのために稚貝の放流や漁場づくり、夜間の密漁監視等を行っているが、環境が変わることはなかった。しかし、むらづくり活動を通じた漁業者の大きな意識改革により、高値で取引される時のみにアワビ漁をする出荷調整を開始した。気まぐれな自然が相手、高値時に天候が悪ければ漁に行くことができず、収入に直結する大きなかけでもあったが、今では町内で一番高い価格で取引され、漁業者の収入増になっている。

(2) アラメ加工品の開発

水深 5 ～ 10m の岩場に豊富に自生する海藻アラメを夏に漁師が採取し、天日干しした乾燥アラメを水に戻して洗浄、スライス、蒸して乾燥させたものが、伊座利の「アラメちゃん」である。鮮度を保ち磯の香りを残すために、全工程を一日で完了させている。調理しやすく食べやすいように幅 1.2 mm に細く刻んでいるのも特徴である。

平成 15 年に整備した加工場には、漁業者の他、地区の住民も従事している。伊座利校の児童・生徒達は、レシピづくりや徳島市内の産直会場等で PR 活動を行うなど、地区全体がアラメに関わっている。

さらに、アラメのもつ高い栄養価を活かし、化粧品会社と連携し、新たな特産品として化粧品の開発に取り組んでいる。

(3) 震災疎開パッケージ

地震等の災害に遭った人の疎開を受け入れるシステムの全国ネットワークに加入している。パッケージは、東京の早稲田商店会を中心に全国各地の商店街でつくる全国商店街震災対策連絡協議会が考案し、平成 14 年から始まっている。

疎開を希望する人は一人 1 年間 5 千円を支払い、加入者は地震が発生した場合、ネットワークに参加する地域に疎開し滞在できるようになっている。有効期間は 1 年で、その年に災害がなければ、加入者はネットワーク参加地域の特産品がもらえるようになっており、伊座利では、新たな特産品「アラメちゃん」

を提供している。

このような取組は、特産品の販路拡大にとどまらず、住民の防災意識の高揚にも役立っている。

(4) 新たな魅力づくり

新たな魅力づくりとして漁師のおばちゃんが営む「イザリ cafe」をオープンさせた。季節ごとの地域産物を使った食事の提供と、宿泊もできるようになっている。

(5) 漁業後継者、I ターン就漁者の育成

地区の頑張りを肌で感じた当時 20 代前半の若者は、一緒に地区を盛り上げたいと勤め先を辞めて漁家である実家の後継者になった。漁業をしたいと家族 5 人で大阪からやってきた 30 代の男性。同じ大阪から、漁業に憧れやってきた 20 代の男性。海女（あま）をしたいと福岡から一家 4 人で転入してきた 30 代の女性等、厳しい漁業条件にも関わらず、漁業後継者や I ターン就漁者が育っている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 地域と学校は一つ

ア おいでよ海の学校へ

海の学校は、平成 11 年の開校以来夏冬の年 2 回開催してきたが、天候の関係もあり、17 年から夏のみ開催するようになった。定数 30 名で始まった海の学校も、回を重ねるごとに話題と共感と呼び、18 年次は、県内外からの親子連れの参加者や住民も含め約 350 名が参加した。

「息子がこんなにはしゃぐ姿を見たのは初めて。ここは子供にとっての楽園なのか。来てよかった」という参加者。

また 92 才から 5 才までの家族 9 人で参加した女性の「穏やかな気持ちになりました。みんな来年も来たいと言い出しました。・・・そうそう私の水着も買っておかないと・・・早くに逝ったお父さん（主人）、元気で過ごせるように見守ってね」という新聞投稿の記事を見た多くの住民が感動し、新たな活動意欲をそられるものであった。



写真 2 「海の学校」でのカヌー体験

伊座利地区の地域おこしの原点であるこの活動は、全国各地から家族ぐるみの移住者が相次いだばかりか、地区で生まれ育った若者の定住化促進へとつながり、13 年ぶりに赤ちゃんが誕生するなど、人口は 124 人までに回復。平成 6 年 4 月現在、44.0%だった高齢化率も、18 年 4 月現在、25.8%までに低下。伊座利校の児童生徒数も増加し、秋祭りのかき太鼓や関船が復活するなど、大

きな成果となっている。

イ ふるさと学習「磯学習」

協議会発足以前から、地区の良さを子供達に教える活動が始まっていた。約30年前、当時は学校を卒業すると地元を離れてしまう子供達のために、ふるさとの良さを知って欲しいと、大人達が「学校専用の磯」を作った。地区の大人みんなが先生となり、海辺の生物の生態を調べたり、漁をしたり、自然と人々に触れたり、そして学んでいたのが「磯学習」の始まりである。

現在は1学期の総合的な学習の時間に、歴史や産業、文化等を子供達が地区の家々を訪ねて調べ、その成果を住民の前で発表するようになった。毎年7月中旬の夕方、漁港の港広場で開催される発表には、住民のほとんどが集まり、子供達の発表に大人達は応援の言葉やヤジで大いに盛り上がっている。

平成18年の磯学習では、小学校1・2年生が、伊勢エビ捕り名人の高齢者から伊勢エビの生態やエビ網漁について教わり、また女性達からは食べ方について学んだことを、「伊座利の伊勢エビ3姉妹」と題し、伊勢エビに扮して劇と歌で発表した。3・4年生は、昔の遊びや季節の行事について調べたことを発表した。中でも、現在は行っていない節句の遊山箱の発表は、お年寄りや遊山箱研究者をも感動させる内容となっていた。5・6年生は、大人達の子供の頃のおやつについて、高齢者や女性達に教わり、川エビを使った「えびせんべい」づくりにも挑戦し発表を行った。

ウ 学校給食

伊座利校では、地域のおっちゃん、おばちゃんが先生となって様々な漁業体験を行っている。夏のアワビ漁、秋の伊勢エビ漁、春のひじき刈り等で、子供達が体験で捕ってきたアワビや伊勢エビは豪華な給食となっている。また、普段から伊座利校では、地元産の魚や海藻等の食材が給食に出されている。このような取組は、未来を担う子供達に、漁業や地域、そして住民に対する愛着を育んでいる。



写真3 伊勢エビの給食

エ 子供達が全国へPR

平成12年当時、小6児童が切実な願いをこめ42枚の原稿用紙に綴った作文“伊座利の灯よ！永遠に”は、『書いても書いても書きつくせない伊座利での豊かな体験と地域の人々との心温まるふれあいの様子とともに、伊座利の灯よ！永遠に…と祈らずにはいられません。』、また、『過疎地で学校を中心とした地域社会の温かさが感動的でした。』との審査評を得、第50回全国小・中学校作文コンクールで「文部大臣奨励賞」に輝いた。また、第53回の同コンク

ールでも、海辺の小さな学校の3年間を綴った「変な学校、素敵な学校」が「文部大臣奨励賞」に輝くなど子供達の純粋な心が伊座利地区をPRする大きな力となっている。

オ 漁村留学

伊座利校に地区外の子供達を受け入れる漁村留学は、子供だけでなく、親も一緒に転入してもらうのが伊座利流。「子供は親と一緒に暮らすのが一番」との思いからである。仕事を投げうって都市部から移り住む人や、父親を都会に残して、母と子で移り住む人も。北海道、千葉、東京、京都、大阪、福岡、そして徳島県内等、全国各地から家族が転入してきている。短期の留学も含めて、転入してきた子供達はこれまでに50人を上回る。

転入を希望する家族は伊座利校で体験入学をした後、協議会と伊座利校との3者面談に望む。住民が20人並ぶこともあり、伊座利に本当に住みたいのか、住民になる覚悟が家族にあるのかといった「親の本気度」を測る3者面談は、地域の一員に迎える前の大事な儀式である。

このようにして転入してきた家族には、協議会が借り受け改修した空き家等を用意する。挨拶をしない子供がいれば地域の大人がしかりつけ、親に対しても、考え方が間違っていると思えば遠慮なく物申すのが伊座利流。これは家族同様の思いからである。

(2) 伊座利の魂を次代へ繋ぐ（地域内での世代を越えた交流活動等）

ア 祭りと共楽運動会

他とは一味違うのが、10月14日から始まる伊座利の祭りと運動会である。御輿や太鼓を港まで担いで拝んだ後、小さな砂浜での子供相撲や堤防から海への飛込等。御輿堂に帰った後は、平成17年に復活した子供達を乗せたかき太鼓や関船を繰り出し、夜には神社の前に住民が集まってご馳走を食べたり、子供達の劇や歌で一夜を過ごす。



写真4 祭りの「かき太鼓」

祭りの最終日は、住民がこぞって邪魔をする障害物競走、大漁旗がバトン代わりの「大漁旗リレー」、子供達とお年寄りが一緒になって参加する「いただきさん」など、住民総出のユニークな共楽運動会である。

イ 地域の環境美化活動（ポイ捨て禁止規定）

自然の恵みによって成り立つ伊座利では、環境をブランドにしていいため、全住民が参加し、定期的に海岸や川、道路等の環境美化活動を行っており、活動が終わった後は、子供達やお年寄りなどの交流の場となっている。

また、地区独自にゴミ・タバコなどの「ポイ捨てはやめよう規定」を制定し

ており、違反者には公衆トイレの清掃という罰則が待っている。

(3) 大きく広がる交流の輪

交流をキーワードに地区内外で開催した多彩な活動を通じて、県内をはじめ、全国各地から多くの人々が訪れ、住民との交流を深めている。「えらい辺りなところなのに、何十回、何百回も通ってるのは、大人の心意気みたいなのがあって、そういうおっちゃんやおばちゃんたちとつながっていくということに誇りを感じて、ここが大好きなんです。」と語る絵本作家の梅田俊作氏は、伊座利をモデルにした物語「漁火海の学校」を出版している。その梅田氏と共によく地区を訪れ子供達にカヌーを教えてくれるのがカヌーイストの野田知佑氏。

志を同じくする農山村地域の人達や、ときには海外から訪れる人もあり、交流の輪が大きく広がっている。

(4) 伊座利応援団

人と人とのつながりを深めることから地区の将来が見えてくると考え、将来にわたる親密な応援団員づくりを積極的に展開してきた。今では、関西・関東・徳島市内等を中心に、600 名程の「伊座利応援団員」が伊座利のむらづくりを応援している。

ア 関西伊座利応援団

平成 12 年 8 月、大阪市内で行った関西伊座利応援団発足会には、地区から子供達も含めて約半数の住民と、関西在住の地区出身者等、地区人口の 3 倍にあたる約 300 人が参加した。「今、伊座利の存続が危ぶまれている。活性化策をともに考え、伊座利を未来に残したい。」と協力を求めた。参加者の中には何十年ぶりに再開したという人も多く、親交を深めた活動は、参加者全員に感動を呼び、地区への愛着心を醸成することができた。

イ 伊座利東京プレゼンテーション

平成 17 年 2 月、東京で開催した地区の P R と交流促進活動には、住民の約 1/4 にあたる 30 人が出向き、伊勢エビや海藻アラメの販売、伊座利校の活動写真の展示等を通して、伊座利校への転校呼びかけや地区の紹介を行った。交流会には、伊座利校へ留学体験がある家族、地区を訪れたり関心を持つ都市住民等約 70 人も参加し、お互いの親交を深めることができた。

ウ 伊座利徳島プレゼンテーション

平成 17 年 7 月には、徳島市内でも地区の情報発信を行った。2 艘の漁船に分乗して参加した伊座利校の全ての子供達を含め、地区から約 80 人が出向き、子供達による地区紹介やアラメの販売等、大いに地区の P R を行った。

エ 地区内での取組

地区内においても、平成18年11月に「第1回バンダナアート展」を開催し、情報発信、応援団づくりに取り組んでいる。

第2表 平成18年度年間行事一覧

	各種行事等	総会・実行委員会
4月 21日	伊座利校児童生徒「大敷網見学」	実行委員会 (8, 24日)
5月 15日 24日	地域内再発見ウオークラリー 伊座利校児童生徒「アワビ稚貝放流体験」指導	実行委員会 (22日)
6月 4日 6日 6日 22日	伊座利校児童生徒「大敷網漁業体験」指導 〃 「地域産物（魚介類等）販売体験」 指導 あらめ調査&あらめ活用検討会 伊座利校児童生徒「うなぎ捕り、料理体験」指導	実行委員会 (1日)
7月 10日 12日 13, 14日 29日 29日	「おいでよ海の学校へ」開催協議 クリーンアップ 伊座利校「磯学習」参画 第12回おいでよ海の学校へ コミュニティスクール勉強会	総会（3日） 実行委員会 (4日)
8月 15日 17, 18日	地域産物等展示即売（地域内） 伊座利プレゼンツ in 有楽町	実行委員会 (11日)
9月 4日 14日	転入希望家族面談 地域づくり情報交換会	実行委員会 (4, 26日)
10月 5日 6日 7日 14, 15日 16日 21日 24日 26日 28, 29日	クリーンアップ 子育て支援トークセッション 絵本づくり教室、漁業漁村体験活動 秋祭り 伊座利共楽運動会 児童福祉施設 日帰りキャンプ招待 伊勢エビ料理教室 伊座利校児童生徒「エビ網漁業体験」指導 田舎フェア（六甲アイランド）参加	
11月 4日 13日 13日 18, 19日 25～12月2日 28日	青空市場（東京銀座）でPR活動 クリーンアップ 転入希望家族面談 第1回バンダナアート展、地球元気村、漁業漁村体験活動 バンダナアート展 in 那賀川図書館 人権研修会	実行委員会 (10日)

12月 10～31 日 20日	イルミネーション「バス停」設置点灯 あらめPR用パンフレット作成	実行委員会 (2日)
1月		実行委員会 (12, 16, 26日)
2月 12日 21日 23, 24日	転入希望家族面談 伊座利校児童生徒「アワビ稚貝放流体験」指導 地域資源活用方策等調査	実行委員会 (3, 16日)
3月 16日 21日 24日 28日	カヌー進水式 阿波市ボランティア団体他視察来伊座利（情報交換） 転入希望家族面談 あらめ入り試作化粧品&地域PR活動（徳島市内）	実行委員会 (1, 10, 26, 31日)